

平成 19 年度卒業論文

オスマン朝宮廷における小姓たちの生活
—Ali Ufki Bey の手記を中心に—

南・西アジア課程 トルコ語専攻

学籍番号 8504042

三澤志乃富

(40×25)

| | |
|---------------------------------|----|
| はじめに | 2 |
| 第一章 Ali Ufki Bey とその手記 | 4 |
| 1. Ali Ufki Bey の生涯 | 4 |
| 2. Ali Ufki Bey の手記 | 6 |
| 第二章 Ali Ufki Bey の手記に見るオスマン朝の小姓 | 7 |
| 第一節 小姓の調達 | 8 |
| 第二節 小姓の教育・軍事訓練 | 9 |
| 1. 弓術の訓練 | 11 |
| 2. 刀の訓練 | 12 |
| 3. レスリング | 13 |
| 4. 槍の訓練 | 13 |
| 5. 馬術の訓練 | 13 |
| 第三節 小姓の日常生活 | 14 |
| 1. 食事 | 14 |
| 2. 衣類 | 15 |
| 3. 洗濯・繕い | 16 |
| 4. ハマム | 17 |
| 5. 睡眠・起床 | 17 |
| 6. 病院 | 18 |
| 第四節 小姓の恋愛 | 19 |
| おわりに | 21 |
| 参考文献 | 22 |

付録 『トプカプ宮殿の生活 Topkapı Sarayı'nda Yaşam』全訳

はじめに

オスマン朝の有名な奴隷制度といえばデヴシルメがあるが、これは 15 世紀以降に広まったものである。¹それまでは他のイスラム王朝と同じように戦争捕虜を用いていた。しかし 1402 年のアンカラの戦いで敗北して以来戦争捕虜を確保するのが難しくなったためこのデヴシルメが採用されるようになったといわれる。オスマン政府はデヴシルメは奴隷制度ではなく特殊な形態の徴兵制度であるとしたが、実際は役人や軍人たちはスルタンの奴隷であるとみなされており、またスルタンの奴隷となることは名誉であり特権であるとされていた。

オスマン朝時代に起こった奴隷制度に関するほかの変化として、奴隷を官僚としても扱うようになったということがあげられる。オスマン朝以前は奴隷は主に軍人として使用され、官僚にはムスリム、特にウラマーが登用されていた。オスマン朝でも 15 世紀半ばまでは奴隷は主に軍人として扱われたが、メフメット 2 世が重要な役職を主に奴隷出身のものに与えていたために帝国の高官に奴隷出身のものを任命する風習ができた。メフメット 2 世の大臣が全て奴隷出身のものたちであったことはよく知られている。²デヴシルメによりイスタンブルに連れられてきたものたちも当然、イエニチェリに配属されるだけでなく適性に合わせ地方の総督職や宮廷吏僚としても活躍することができた。つまりオスマン帝国において権力を得ることができたのである。

デヴシルメは「カヌーヌ・デヴシルメ」という法律に基づき行われる。はじめはアルバニア、ギリシア、ブルガリア、セルビア、ボスニア、ヘルツェゴヴィナ、ときにはハンガリー方面でも行われたが、徐々にアナトリアも対象地区に入ったようである。³

¹ デヴシルメに関しては次の文献による。Halil İnalcık, translated by Norman Itzkowitz and Colin Imber, *The Ottoman Empire*, George Weidenfeld and Nivolson Ltd, London, p. 78.(以下、İnalcık)

² İnalcık, p. 77

³ 三橋富治男「デヴシルメ」、日本イスラム協会、嶋田襄平、板垣雄三、佐藤次高監修『新イスラム事典』平凡社、2002、p. 348.

このデヴシルメは3～7年毎にガーディーやスィパーヒーの指揮下で各村の担当者によって行われた。各村の担当者は村に住む8～12歳の男児とその父親を呼び出し、適切な子を選別した。この選別にはいくつかの条件があり、農業に従事するキリスト教徒の子弟のみを対象としユダヤ教徒やムスリムは徴用を免除された。また、孤児や片親、既婚者も徴用免除となった。この際、トルコ人は権力を乱用したり謀反を起こす可能性もあるという理由から選別の対象外とされた。⁴こうして選別された身体、容姿、頭脳ともに優れたものはデヴシルメの担当者に名前と外見的特長を記録簿に書き込まれ100～150人のグループにしてイスタンブルのイエニチェリ隊長の元へ送られ、ここでもまた宮殿仕えのものと軍隊に入団するものに分ける選別を受けることとなる。

イスタンブルに連れてこられたキリスト教徒たちはここでもう一度選別を受け、とくに容姿端麗かつ頭脳明晰と思われるものたちは小姓として宮殿での勤めを言い渡された。この選別は時にはスルタン自ら立ち会って行われることもあった。

この選別で選りすぐられた男児たちは特別な訓練を受けるためにイスタンブルやエディルネの宮殿へと送られた。選別にもれたものたちは後にイエニチェリへ入隊することになるのだが、入隊するまでの間アナトリアの農村などへ金貨1～2枚で貸貸された。⁵これはトルコ語やトルコの習慣を学ばせるためのもので、メフメト二2世によって確立された方法である。

宮殿に入った小姓たちはまず2～7年⁶宦官のもとで指導を受ける。小姓たちは馬術や弓矢、剣術のほかに適性にあわせ工芸や美術も学ばされた。その後2度目の選別を受け有能なものを宮殿にあるスルタンの2部屋(ビュユクオダとクチュクオダ)で働かせ、残りのものはカプクルというスルタン直属の常備軍へと入隊させた。そしてこの部屋で4年ほど勤めた後もう一度選別を受け適性のあるものは他のスルタンの部屋での勤務を言い渡される。ここでも選考にもれたものはカプクルへと編入される。選考を通過した小姓たちが仕える

⁴ İnalçık, p. 78.

⁵ İnalçık, p. 79.

⁶ İnalçık, p. 79.

部屋は3つあり、宝物庫部屋、食料庫部屋、そして遠征部屋である。これらの部屋で働く小姓の数はおよそ宝物庫で60人、食料庫部屋で30人、そして遠征部屋は17世紀初めに作られたものであるが1679年までには134人が仕えるようになっていた。⁷これら3つの部屋で仕えた後最終審査を受け、これに合格したものはハスオダとよばれるスルタンの私室での勤務につくことが許される。このスルタンの私室に仕える小姓たちはスルタンに直接接することができ、スルタンのトイレや着替えの世話、護衛などの仕事にあたる。とくにこの小姓長は誰よりもスルタンの近くにおり片時もはなれなかった、そのため宮廷内では白人宦官に継ぐ権力を有していた。小姓出身者のなかからは、やがてSokollu Mehmed Paşa⁸のように大宰相に出世するものもあった。

以上のように、オスマン朝における小姓の制度は、たいへん特徴的で興味深いものである。本論ではオスマン朝において出廷後に大きな権力を握ることになるこの小姓たちに着目して彼らが宮廷においてどのような生活を送り、またどのような教育を受けていたのかについて論じる。その際に西欧でも有名なポーランド人の元小姓 Ali Ufki Bey が宮廷での生活を回想し記した手記を利用する。

第一章 Ali Ufki Bey とその手記

1. Ali Ufki Bey の生涯

Ali Ufki Beyは1610年にウクライナでポーランド人貴族の息子として生まれた。彼は Albert Bobowski, Albertus Bobovius, Alberto Bobovio, Ali Bey, Hali Beyなど数多くの名前を持っているが⁹、本論では彼が書物を記す際に用いたペンネームであるAli Ufki

⁷ İnalçık, p.80.

⁸ ca.1505-79、セルビアの貴族子弟であったがデヴシルメされイスタンブルに連れてこられる。ハスオダで勤めた後権力を得て大宰相となる。G. Veinstein, "Sokollu Mehmed Paşa", *Encyclopedia of Islam*, Vol. 9, Leiden Brill, 1997, pp. 706-711.

⁹ トルコ語で出版されたAli Ufki Beyの手記に付された、同書の序文による。Stefan Yerasimon and Annie Berthier, "Sunuş." In Ali Ufki Bey, çeviren Ali Berktaş, *Topkapı Sarayı'nda Yaşam: Albertus Bobovius ya da Santuri Ali Ufki Bey'in Anılar*, Kitap

Beyで統一する。彼は言語に長けておりポーランド語、フランス語、ドイツ語、英語、ラテン語、古代ギリシア語、現代ギリシア語などを話すことができたという。また幼い頃から音楽の英才教育を受けていた。¹⁰

Ali Ufki Beyは、18歳になろうとするときデヴシルメに徴用されイスタンブルへと連れてこられムスリムへと改宗させられた。¹¹彼はエディルネ宮で教育を受け、22-29歳の間にトプカプ宮殿へと入った。トプカプ宮殿では19年間過ごした。彼は内廷(Enderun)でトルコ語や音楽を学んだ。そのとき西洋音楽の才能を評価されその後宮殿で音楽教師や宮廷音楽家として活躍するこことなる。またAli Ufki Beyはトルコに初めて楽譜を伝えた人物としても知られており、トルコ古典音楽や民謡を含む名曲集を残した。彼の代表作である*Mecmua-i saz ü söz*は大英図書館に、その草案である*Şiir ve Şarkı Mecmuası*はフランス国立図書館に保管されている。¹²

Ali Ufki Beyは大変多才な人物であり、音楽家、作曲家であると同時に言語学者であり、詩人、翻訳家、歴史家、そしておそらくミニアチュール画家でもあった。¹³そして前述の様に何ヶ国語も話すことができたのでイスタンブルにおいて文化的、外交的な役割も果たしていた。イスタンブルに行き来したり、滞在したりするヨーロッパ人の外交使節や旅行家、商人、東洋学者、宣教師たちと頻繁に接触していた。¹⁴彼の名はヨーロッパでも広く知られておりフランス国王の図書管理人Carcavyがよい書物やコインを探させるために東方へ派遣したPeser Vanslebのもとへ送った指令文のなかにAli Ufki Beyの名前が出されているという。この指令文は以下の通りである「研究や旅行の際に、トルコ語、アラビア語、ペルシャ語、アルメニア語のような東方言語に精通した誉れ高い人物を見つけたならば、彼を陛下の下で働かせることやもっと彼に適した名誉ある地位を与えることを約束し

yayınevi, 2002, p. 12 . (以下、Yerasimon and Berthier)

¹⁰ Yerasimon and Berthier, p. 13.

¹¹ Yerasimon and Berthier, p. 12.

¹² Yerasimon and Berthier, p. 12.

¹³ Yerasimon and Berthier, p. 13.

¹⁴ イギリス大使のThomas Smithや宣教師Isaac Basireなど。Yerasimon and Berthier, p. 14.

フランスに連れてくるよう努力せよ。少し前は、この職に本当に適していた人物は、スルタンの通訳Ali Beyであると私は考えていた。」¹⁵

Ali Ufki Beyの晩年は不明であるが、1657年ごろ宮殿を離れエジプトのあるパシャの下へ行き、その後退職しイスタンブルへ戻ってきたといわれる。1662年から1664年の間に彼の最大の功績である聖書のトルコ語訳を完成させている。¹⁶1675年にイスタンブルで亡くなったとされている。¹⁷

2. Ali Ufki Bey の手記

次に、本論文で用いる彼の手記の写本や刊本について紹介する。

Ali Ufki Beyがトプカプ宮殿での生活を振り返って記した手記は1665年にイスタンブルで書かれたものでありイタリア語で表記されている。この手記のドイツ語訳は、Nicolas Brennerにより1667年にウィーンで発表され、つづいて、イタリアのパルマでも1679年にCornelio Mangiによってイタリア語で出版された。¹⁸また、Ali Ufki Bey自身のサインの入った1665年付けのこの手記の写本が大英図書館に保管されている。¹⁹

しかし本稿で用いたAli Ufki Beyの手記のトルコ語訳は、フランス語で1999年に出版された刊本²⁰からの翻訳である。1999年に出版されたフランス語のテキストは、フランス国立図書館に保管されているフランス語写本からとられたもので、上記のイタリア語（あるいはそのドイツ語訳）とは、語り手が異なっている。すなわち、この本論で使用したテキストのオリジナルは、イスタンブルに滞在していたフランス大使Pierre de GirardinがパリにいるパトロンColbert de Croissyに宛てて1686年に書いた書簡で、Ali Ufki Beyがイ

¹⁵ Yerasimon and Berthier, p. 13.

¹⁶ Yerasimon and Berthier, p. 13.

¹⁷ Yerasimon and Berthier, p. 22.

¹⁸ Yerasimon and Berthier, p. 14.

¹⁹ 大英博物館、Harley Collection No, 3409.

²⁰ Albert Bobovius, *Topkapi, Relation du serail du grand seigneur*, Actes sud, 1999.

タリア語で記した *Topıkapı Sarayı Betimlemesi* を Girardin がフランス語に翻訳しつつ、Girardin が、自分の言葉として（一人称で）書いたものである。その書簡は 323 ページからなり、赤い革のカバーがかけられている。この著書の冒頭にはイスタンブールの風景画が載せられている。また、この Girardin の書簡をそのまま写した写本が 1685 年ごろにイスタンブールで作成され、それは現在ハーバード大学の Houghton 図書館に所蔵されている。²¹

Ali Ufki Bey の残したこの手記はトルコの宮廷での生活を西洋人としての視点を保ったまま描写しており、またスルタンの宮殿での生活の変化期を記したものとしてもとても興味深いものである。Ali Ufki Bey のほかにも母国に戻った後に宮廷での生活を思い返して手記を残したものはいるが、²² Ali Ufki Bey のこの手記はそれらのものよりも正確で詳細に記されており、また上記の点において異彩を放っているといわれている。

第二章 Ali Ufki の手記に見るオスマン朝の小姓

以下、実際に Ali Ufki Bey の手記の中から小姓たちの調達方法や教育、日常生活などのテーマについてどう書かれているかまとめていく。

第一節 小姓の調達

小姓はデヴシルメによって集められる。デヴシルメはスルタンの勅令によって行われる、キリスト教徒の容姿端麗で健康な男児を無理やり徴用しイスタンブールで訓練を施してイエニチェリや小姓として育てるための制度であるが、その実施方法について、Ali のこの手記

²¹ Yerasimon and Berthier, p. 15.

²² 1470 年から 1481 年まで小姓を務めた宝物庫長であったヴェネチア人の Giovan Maria Angiolello や 1501 年から 1514 年まで小姓であったジェノヴァ人の Giovanantonio Menavino など。Yerasimon and Berthier, p. 22.

では詳細な記述がなされている。Ali Ufki Beyによると、通常は3年に一度行われるが必要な人数が足りているとスルタンが判断した場合には延期されるという。²³このデヴシルメでは3人の子供につき1人を徴用し、この対象となるのは10歳から18、20歳ほどの美しく健康な男児であること、しかしいくら子供が大勢いたとしても1つの家庭からはたった1人のみを徴用することになっていること、また結婚しているものはこの徴用から逃れることができることが明らかにされている。裕福な家庭ではデヴシルメ長に賄賂を渡すことによりデヴシルメを免除してもらうこともあったようだ[pp. 38-39/p. 14]。

デヴシルメを効率的に行うための方法も述べられている。

「司教や村の聖職者たちは洗礼や結婚記録や死亡者の戸籍を提出し、これらが本物であると宣誓させられている。この宣誓が嘘であった場合は死刑に処される。このようにしてスルトンの使いのものは町や村のどれほどの子供がいるかを完全に把握しているのである。高圧的で無慈悲な代理人は一家に子供がいるかどうか、子沢山かどうかを自分たちで目にすることなくもつとも屈強でもつとも見目麗しい者たちをためらいもなくかき集める。」

[p. 39/p. 14]

このためほとんどのキリスト教徒たちはデヴシルメから逃れることができず、親たちはわが子を手放さざるを得なかったのである。

しかし、このデヴシルメをはじめから免除されている者たちもいた。トルコ人がデヴシルメの対象にならないのは前述の通りだが、実はこのほかにもユダヤ人やアルメニア教徒も免除されていた[p. 39-40/pp. 14-15]。

²³ Ali Ufki Bey, *Opt. cit.*, p.39(以下、Ali Ufki Beyのテキストより引用する場合は引用箇所 [p.××/p.××]として表示する。スラッシュ後のページは付録の日本語訳でのページを示している。)

Ali Ufki Bey の手記によると、アルメニア教徒がデヴシルメを免除される理由は、アルメニア教徒たちがイエスに神性を与えていなかったことによる。このためにアルメニア教徒たちはオスマン帝国においてギリシャ正教徒やその他のキリスト教徒たちよりも優遇され、特権を与えられていた[pp. 39-40/pp. 14-15]。これに対して、ユダヤ人の場合は理由が異なっている。ヨーロッパと同じようにオスマン帝国においてもユダヤ人たちは軽蔑の対象であった。とても臆病で卑怯だと思われており、商売の才能しかないと思われていたためである[p. 40/p. 15]。

第二節 小姓の教育・軍事訓練

小姓たちはそれぞれの才能に合わせた教育を施されるが、基本的としてまずは全員が書物、特にコーランに敬意を払うように教えられる。その後は野望や熱意のあるものが、より高い地位を目指して学問に励む。しかし小姓たちにとってアラビア語はとても難しいものであるとその習得には長い時間が必要であった。Ali Ufki Bey によるとアラビア語の教育は以下の様に行われた。

「コーランがアラビア語で書かれていて、法が他の言語に訳すことを禁じていたため何が書いてあるかわからぬままにコーランを読破した後に読まれるほかの書物は *Nasara*, *Bina*, *Maksud*, *İzzi*, *Merrah* や文法 [ilm-i tasrif] に関するより多くの作品である。その後 *Avamil*, *Misbah*, *Ecurrumiyye*, *cami* や統語法を教えるほかの書物を与えられる。そしてこの方法で言語の基礎法則を学んだ後、ムスリムの信仰やシャリーアを取り扱う書物をトルコ語として説明させる。このとき *Şurutü's-salat*, *Mukaddime*, *Kuduri*, *Sadru'-şeria*, *Mouhekah*, *Hidaye*, *Dürer* や *Gurer* などの書物を手に取りこれらについての授業をうける時、ほかのもろもろのことについての説明を聞くことや、宗教の知識を扱い宗教について教育されることを保障するこれらの書物の意味を暗記することを強要された。」

[p. 106/p. 67]

また、アラビア語以外にもペルシャ語を学ぶものもいた。ペルシャ語は彼らにとってはアラビア語よりも習得が簡単であったようだ。彼らがペルシャ語の学習のために読む書物は、*Danisten*, *Şahidi*, *Bostan*, や *Hafiz* などである。このほかにも *mülemma* と呼ばれるトルコ語、アラビア語、ペルシャ語を使った、装飾的な言語で書かれた美しく繊細な散文や、とても優雅な韻文双方の文からなるほかの書物も読んでいた。 [p. 106/p. 67-68]

ペルシャ語を学ぶものたちは高官たちの秘書官や書記を目指しており、トルコ人がよく使用する美しい書物や様々な勅令や判決文の書式を使いこなせるように模写に励む。Ali Ufki Bey は彼らのことを以下の様に述べている。

「毎週金曜日、最初の礼拝の後に写字生の作品が点検される、そして美しい筆跡で完璧に書いたものが現れると、簡単に宝物庫や食料庫の秘書、つまり全ての小姓の記録簿や出席簿を取るデフテルジになる。この種の仕事の収入はよい。しかし使用される書体がとても多いために、この技術を完璧に得ることはかなり難しい。我々の丸文字、イタリック、*batard* [丸文字とイタリックの間] などの書体のように、彼らにも約 12 種の書体がある。書き記すものによって適した種類のものを選ぶ。最もよく使われるものは書記文字である。御前会議の記録、証書、スルタンの勅書、国内通信、検査などのためにそれらのもの全てに固有の特別な書体がある。」 [p. 107/p. 68]

このほかにもパシャやカーディーの職に就きたいものはイスラム法や法学を、イマームを目指すものたちはシャリーアの宗教的なことに目を向けて勉強に励むようである。また、コーランを全て暗記したものはハーフズと呼ばれ、トルコ人の間ではとても尊敬を集める。そのためモスクで働くハーフズたちは、たとえ権力をあまり持っていなくても人々の間ではまるで聖人のように扱われる。 [p. 107/p. 68]

小姓たちは学問だけでなく軍事訓練も受けている。訓練内容は、弓、刀、レスリング、槍、馬術である。

1. 弓術の訓練

小姓たちの大半は弓矢で戦う、そのため弓術に関しては徹底した指導が行われている。第一の訓練内容は以下の通りである。

「これに到達するために行われる最初の訓練は壁にくくられた滑車を用いたものである。中に 10 オッカ(okka)(1 オッカは 42 オンスに相当する重さの単位である)の石を入れた袋がぶら下がっており、滑車から垂れた紐を力を加えて後ろへひっぱり、左手は壁につく。この訓練によって筋を伸ばす、力がつくとき毎日袋に新たに石を追加する、最後には袋の重さは 40 オッカにもなる。このようにして十分に訓練して少し腕を広げたのち、やわらかく曲げやすいが、弦の箇所には鎖をつけた弓を与えられる。この弓は矢を射るためではなく、毎回の訓練で疲れるまであるときは右手で、あるときは左手で伸ばすというように、腕を鍛えるために使われる。その後それぞれの距離に応じてやわらかい弓や硬い弓を与えられる。これは矢を射る前、矢じりを弓の柄に触れるところまで伸ばす。誰が弓をたくさん続けて伸ばすことができるかといって賭けをする。多くのものはこの作業を 200 回もできるほど力がある。この訓練でこのように腕を鍛えたものたちのうち何人かは鉄の弓を扱える者のみに与えられる称号である‘ケマンケシュ’を得る。実際はこの弓は鉄製ではなく、非常に硬い動物の角でできている。この弓は、訓練をしていないものが全力でひっぱったとしても弦は彼らの耳の下に置かれた 1 銀貨コインを落とせるほどもびくともしない。」 [pp. 57-58/p. 29]

この訓練を受けたものは蹄鉄に矢で穴を開けたり、ひび一つ入れることなく矢をガラスを貫通させたりすることができるという。また威力だけではなく、友人の 2 本の指の間に挟まれたコインを射抜けるほど技術も熟練されていたらしい。 [p. 58/p. 29]

第二、第三の訓練は、重たい木の幹や欠片を運ぶことである。Ali Ufki Bey の記述によ

ると次のようなものである。

「一番軽いものから始め、徐々に最も重い欠片を持ち上げることにとても慣れることができたものは、最も重い幹をまるで手で棍棒を運んでいるかのように楽に運ぶ。これらは技術が生まれ持った力を簡単に変えられるということや、生まれ持った力に新しい力を与えることを示している。また、彼らは子牛を運び始めた者が動物が成長し終わるまで毎日運び続けて、最後には雄牛を苦勞せずにとりだけ肩に担いで耐えられるかということに挑戦し始めた。

第3の訓練は、右手の上に 40,50,60 あるいは 100 リブレ(libre)(1 リブレ=500 グラム)の鉄の重りを持ち上げることである。手首をこれほどの大きな負荷を引くことに慣れさせたものの力や技術によってこの重さを変える。中には 120 リブレやもっと重いものを片手で頭の高さにまで上げられるものも現れる。訓練や慣れが人間の力をどのように増強されるのかということを知らされたとしても、この偉業は信じられないように思える。」

[pp. 58-59/pp.29-30]

2. 刀の訓練

棍棒や刀の訓練では左手に盾のかわりにクッションを、右手には刀のかわりに棍棒を持って行われる。慎重に前進したり後退したりして、様々な打撃を振り下ろす訓練を行う。より実践的な訓練では皮膚の硬くなったラクダの死骸の足や、ヒツジの頭を切り落としたりする。スルタン・ムラドの時代には、動物の代わりに罪人の首を切り落としていた。スルタンは特に太って脂ぎった罪人を用いるのを好んだ。 [p. 58/p.30]

3. レスリング

レスリングには特有の決まったやり方がある。

「レスリングを行おうと思うものたちは、服を脱ぎオリーブオイルに浸された雄ヤギの皮で作られたパンツをはき‘掴まれる場所を残さないように’とか‘お互いの手をつかむこ

とができるように’ といって全身、さらには頭まで油を塗りたくる。完勝するためには敵を背中やへそを空に向ける形で引き倒し上に乗らなくてはならない。」 [pp. 59-60/pp. 30-31]

レスリングを専門に行うレスラーも存在し、ときにはスルタンの御前でレスリングを披露することもあった。

4. 槍の訓練

槍の訓練では、まずは力をつけるために非常に重たい鉄製の杭を遠くに投げる訓練から始める。そして力がつくと徐々に的から離れ命中させる練習を行う。これらの訓練を通して熟練した技術を身につけたものは的から 50 歩離れた場所からでも見事に命中させることができる。これはヨーロッパの人々が火薬を使った武器で成し遂げるのと全くかわらない性能である。 [p. 60/p. 31]

5. 馬術の訓練

この訓練はジュンディと呼ばれるものによって行われる。このジュンディたちは大カイロのパシャからスルタンへと紹介されたものたちである。武器や戦争にとっても関心のあったスルタン・ムラド4世は馬術にも通じており、同時代のもっとも優れた 40 人のジュンディを招いた。このジュンディたちの信じられないような技術を Ali は以下の様に記している。

「はじめに、このジュンディたち全員が投げられた槍を馬上でさっと受け取るという技術を持っていることをお知らせしよう。幾人かはギャロップに入ったときに馬の鞍をはずして、一時手で掴んだ後、全くとまることなく再び馬に鞍をつけることができる。他のものは鞍の上に立ち馬に乗ることができ、何人かは片方の足をひとつの馬に、もう片方を他の馬の上に置いてギャロップで駆けることができる、そしてこのような困難な状態で馬の蹄鉄に矢を射たり、とても高い木に止まっている鳥を射殺したりすることができる。何人か

はというと落馬するかのように馬の腹部にすべりその後再び鞍の上に現れる。」 [pp.60-61]
さらにスルタン・ムラド4世はこのジュンディたちに難問を課した。鞍の上に立って馬に乗っているときに、全く減速することなく馬を交換する技を披露するよう求めた。ジュンディたちは何度も落馬し骨折した後この技を成功させた。スルタンは彼らを賞賛し、たくさん褒美を与えた。女好きで知られたスルタン・イブラヒムやその息子が狩りに熱中していたスルタン・メフメドもジュンディを気に入っていた。しかしその後ジュンディは廃れAli Ufki Beyがこの手記を記した時代にはこのような素晴らしい技を成し遂げることのできるものはいなくなっていたようだ。 [p. 60/pp. 31-32]

このように、イスタンブルに連れてこられた小姓たちは様々な教育を施され、適性に合わせて高位の軍人や官僚を目指すことができた。

第三節 小姓の日常生活

Ali Ufki Beyは小姓たちの宮殿内での生活についても詳しく記述している。手記のなかではトプカプ宮殿での生活のほかには付属宮殿²⁴での生活についても述べているが、本論ではトプカプ宮殿に関する記述に限定してまとめることにする。

1. 食事

小姓たちは1日2回、午前9時と午後3時に食事をする。食事には基本的に肉と大釜いっぱいのスープが出される。しかしこれらはひとりひとりに分け与えられるわけではないので、ときには肉が行きわたらずスープでお腹を膨らませなくてはならない者もいた。

[p. 42/p. 17]

Ali Ufki Beyは食事の様子を以下のように記している。

²⁴ エディルネ宮、ガラタのペラ宮、競馬場(At Meydanı)のイブラヒムパシャ宮を指す。

「どのテーブルにも 12 人が着き、“sini” と名づけられた青銅製の大きなお盆のまわりに座る。Sinici はお盆を運び、スプーンを磨き、食卓で働き、食卓に関する全てのことに気を配らなくてはならなかった。10 人の中の 1 人が他の仲間のリーダーであり、彼はビョリュクバシュ(bölükbaşı)と呼ばれている。喧嘩をしたものや横暴な態度をとったものを打つために手に長くて大きい柄杓を持っていた。シニジが肉を小さく切り分けた後、ビョリュクバシュがビスミッター(Bismillah)といい最も大きくて良い肉を 2 つ取り分け、残された全員は〔その後〕肉に群がり見つけた肉を取る。肉の香りのほかに何も残されていない人もしばしば見受けられた。彼らは大きなカップ(kapla)に与えられたスープでお腹を膨らませるほかなかった。スープはお腹を満腹に膨らませられるほどたくさん用意されており、いつも増量されているということもこのことを証明している。」 [p. 42/p. 17]

しかし、クチュクオダ²⁵の者たちは例外的に白人宦官長の残り物を他の宦官やビュクオダの下士官兵とともに食べるようになっていた。 [p. 34/p. 10]

また、毎週木曜日には夕食時に全ての小姓たちにピラフが振舞われていたことも記されている。 [p. 43/p. 17]

2. 衣類

小姓たちは衣類によって 2 つのクラスに分けることができる。絹のカフタン(長袖で丈の長い前あきの服)を着たものたちとブロードのドルマン(丈の長い外套)を着たものの 2 つである。毎年大祭の前にこれらを作るのに十分なだけの絹やブロードが分け与えられる。これらは何色でもよかったが、唯一黒色のみが着用することが禁じられていた。なぜなら黒色は預言者ムハンマドだけが着ることのできる色だからである。 [p. 29/p. 5] ビュクオダとクチュクオダの小姓たちはドルマンを制服としていた。彼らはこのほかに黄色い靴やブーツを履き、頭には銀糸の刺繍を施されたキュラフと呼ばれる円錐型の帽子をかぶってい

²⁵ 付属宮殿からトプカプ宮殿へと招かれた小姓たちが住む部屋。人数はおおよそ 150～200 人ほどであった。 [p. 34/p. 10]

た。[p. 33/p. 10]

また、宮殿で働く小姓たちは全員 *zülüf* と呼ばれる巻き毛を耳の近くに残している。この巻き毛を残すのはスルタンの奴隷であるという自覚を小姓たちに持たせるためである。

[pp.33-34]この巻き毛の長さは位によって定められており、伸びすぎた巻き毛は月に1回床屋に切ってもらっている。新人小姓の巻き毛の長さは鼻の先までであり、一番くらの高いものは顎の下まで伸ばしている。[p. 48/p. 21]

3. 洗濯・繕い

付属宮殿では小姓たちが自分で洗濯をすることになっているが、トプカブ宮殿では洗濯はすべて女奴隷に任されていた。小姓たちは自分の洗濯物の束の上に名前と洗濯物の数と素材を書いたメモを置く。大きなバスケットの中に集められた洗濯物は女性たちのいる部屋に運ばれ洗濯されることになっていた。しかしイスタンブルに親戚や兄弟がいた小姓たちは彼らに洗濯をしてもらうこともあった。[p. 68/p. 37]

金曜日には衣類の修繕が行われていた。小姓たちは午後3時までに衣類を修繕して室長に点検してもらう準備をする。もし修復が十分でなかったら室長から罰を受けることとなる。ハスオダ²⁶の小姓たちは一日中脱いだり着たりしなくてもすむように同僚の仕立て屋に繕ってもらっている。[p. 69/p. 38]

4. ハمام

宮殿で働くものたちは週に一度定められた日にハمامへ入る。ハمامでは風呂番たちが体を洗ったり、髪の毛を剃ったり、ケセと呼ばれる布で体を磨いたりしてくれる。ハمام

²⁶ スルタンに直接仕える小姓たちの住む部屋。小姓たちの中で最上位のものである。人数はおおよそ40人であった。[p. 88/p. 53]

へ入る定められた曜日は、アルズアー²⁷たちは金曜日、ハスオダのものは土曜日、宝物庫のものは日曜日、宦官長は月曜日、遠征部屋のものは火曜日、食料庫のものは水曜日、そしてビュクオダのものは土曜日の午前中、クチュクオダのものは同日の午後である。鷹匠部屋のものたちには定められた曜日はなく、宝物庫の者や食料庫の者と一緒に入浴する。[pp.74-75]ハمامはとても健康によく、Ali Ufki Beyはトルコ人はあまり風呂に入らないヨーロッパ人に比べて痛風や胆石にかかるものが少ないと指摘している。[p. 75/p. 42]

6. 睡眠・起床

小姓たちは小さなベッドで眠る。このベッドは敷布団やベッドカバーとなる分厚いブランケットと約 50 c m の長さの小さな枕からなる。寒いときにはこれ以外にも小さなブランケットが用いられる。小姓たちは無言でベッドを整え、室長が就寝の合図²⁸を出すと速やかに床に就く。[p. 46/pp.19-20]他の小姓たちが眠っている間、当番で見張り役となった小姓は手にろうそくの芯を切るためのハサミを持って任務に当たる。彼らは火事などの事故を防ぐために注意を配り、また寝ている小姓が毛布をはがしてしまったら行ってかけなおしてあげたりもする。[p. 34/p. 10]

小姓たちは冬には日の出の 1 時間前、夏は 30 分前まで眠る。しかし昼が長く夜が短くなる季節にはトプカプ宮殿では昼食後から正午まで、付属宮殿では正午から午後 3 時までの間、制服を着た状態ではあるが、眠ることが許されている。これはこの季節には極度に暑くなり、この昼寝の時間をとらなくては倒れてしまうからである。[p. 46/p. 20]

番人が仕事場を照らすランプをひっぱりあげるときに出る、よく油をさされていない滑車のきしむ音が小姓たちの起床の合図である。この音が聞こえると全員瞬時に飛び起きて寝巻きや敷布団を信じられない速さで折りたたみ、寝床の後ろにある洋服かけに掛ける。小姓たちが机として使っている小さなたんすを持ってきて枕を壁にもたせ掛けた後、掃除

²⁷ 内廷(Enderun)の長たちの総称。ハスオダの 4 人の長(シラフダルアー、チュハダルアー、リカブドアー、トゥルベンドオーラン)と各部屋の 5 人の長、計 9 人からなる。[p.66]

²⁸ 杖の先端で床を叩きながら巡回する。[p.46/p. 19]

やランプを灯す当番になっていないものたちは全員体を洗いに行く。清めが終わると小姓たちはアザーンが聞こえてくるまでの間コーランを音読して待機し、アザーンの声とともにモスクへ入り礼拝を行うのである。[pp. 46-47/p. 20]

7. 病院

Ali Ufki Beyは手記の中で小姓たちのかかりやすい病気やその治療法に関しても詳しく記している。彼によると、小姓、特にトプカブ宮殿に比べて待遇の悪かった付属宮殿に暮らす新人小姓たちは恐怖もあいまって病気にかかりやすかった。彼らがよくかかった病気は瘰癧、結核、慢性的な便秘、su toplama(体のあちこち、特に腹部に水がたまる病気)などである。他にも不衛生さが原因となりエディルネ宮で伝染病が大流行したこともあった。²⁹[p. 49/p. 22]

医者によって寝かせる必要があると判断された小姓はトゥマルハーネと呼ばれる宮殿内の隔離された病院に完全に回復するまで入れられる。病人には印として頭にハンカチを括り付けられる。[p. 104/p. 65]

この病院では食事療法が行われている点が注目される。Ali Ufki Beyはこの食事療法を以下のように記している。

「患者が完全に比類のない食事治療を施されていることは注目をひく。エディルネ宮では患者にブイヨンの中で調理された小さな団子のようなパスタ、つまりイタリア式のバーミセリからなる断食食を与えられる。このスープの中に入っているものはもっとも屈強で健康なものでさえ病気にするのに十分な味である。トプカブ宮殿では患者にブイヨンといくつかの脂身のない鶏肉が与えられる。」 [p. 48/pp. 21-22]

小姓たちは新人小姓が御する馬車で病院へと運ばれる。小姓たちはこの機会を利用して宮殿の外にいる友人たちに会うことができる。友人たちに前もってトゥマルハーネに運ば

²⁹ クルバン・バイラムのために殺された羊の血や臓物が太陽に照らされ溶けたために起こった伝染病。100人以上の犠牲者を出した。[p. 49/p. 22]

れる日を知らせておき、馬車の通り道で待機していてもらうのである。彼らは馬車を引く新人小姓たちの手にお金を握らせてゆっくり運転するように頼み、少しでも長く会話する時間をかせぐ。[p. 104/pp. 65-66]

第4節 小姓の恋愛

Ali Ufki Bey は小姓たちの恋愛についても詳細に述べている。

東方世界では同性愛が盛んであるが、Ali Ufki Bey はトプカプ宮殿ほどその傾向が顕著な場所はないと述べている。[p. 70/p. 38]トルコでは美しい若者に惹かれるのは当たり前のことであり詩のテーマにもよく用いられている、もしその心情が理解できなければトルコ人との会話を楽しむことは難しいとまで記述されている。[p. 72/p. 40]

手記によると小姓たちもはじめはただの友情を育てているに過ぎないが、宮殿での生活ではまったく女性の顔を見たり会話をしたりすることが出来ないためにいつの間にか友情が愛に変わってしまうのだという。[p. 70/p. 38]この友情(愛情)はとても強いものであり、無理やりイスタンブルへと徴用されてきたものたちが宮殿から出た後も故郷に帰らずトルコで生活する一番の理由がこの友情のためであると Ali Ufki Bey は指摘している。彼らはこの友情がとても純粋なものであり、お互いを守ること以外には何も望まないということ強く主張していた。[p. 71/p. 39]そして小姓たちは実際にそれを実践していたのである。

小姓たちは恋愛を厳しく禁止されていた。小姓を監視する室長や宦官たちは彼らの言動を見張り、持ち物を検査して恋文の類を所持していないか点検していた。もし必要以上に親しくしている小姓たちを見つけたら寝床の場所替えを行ったりして引き離そうとしていた。[p. 69/p. 38]もしも恋愛関係にあることが室長たちにばれた場合は厳しい鞭打ちの刑を受ける。それにもかかわらず小姓たちは彼らの愛情の深さや一途さを周囲に知らしめるために死さえも喜んで受け入れるのである。中には巻き毛を切り落とし、遠くの要塞や島に

追放されたものもいる。[pp.70-71/p. 39]

しかし、実際には鞭打ちの刑を受けるのは新人小姓や地位の低い小姓たちのみである。もっと高い位に就いている小姓たちの多くは自由に恋愛をしている。Ali Ufki Beyはこのことに関して以下の様に述べている。

「彼らはほとんど完全に自由に恋をしている。しばしば部屋の窓から最も美しい小姓たちを盗み見に行ったり彼らに贈り物を送ったりして、モスクに行ったりする。あるいは部屋の外のほかの場所で彼らと出くわす可能性を見つけると、助けを申し出たりする。恋愛をより順調に行うために彼らを昇進させて短期間で自分の財産や不動産、仕事のパートナーにし、宮殿から自分とともに出ることができる立場を与え、スルタンが彼らに与えた支配地へ赴くときにはともに連れて行くということを約束する。」 [p. 71/p. 39]

また、スルタン自身も同性愛に夢中になっていることもあった。Ali Ufki Bey は彼が仕えていたスルタン・ムラド4世が恋をしていた小姓たちのことをこう書き記している。

「ムラド4世はビュユクオダの小姓であったアルメニア人のムサにこのような恋をした、そして彼にとっても心を奪われ、時には狂ったような状態にまでなった。さらに若い太刀もちのパシャ（人々の中に出るときにスルタンの刀や武器を運び、宦官長に次いで宮殿でほとんど最高位にいる小姓である）にも恋をした。この小姓の美しさを気に入り、ガラタサライの兵営から引き抜いたのである。まずはスルタンの好意によりハスオダに入り、非常に短期間で太刀もちパシャにまで出世した。」 [p. 72/p. 40]

「今現在王座についているスルタン(ムラド4世)はギュルオール(Güloğlu)という名のイスタンブールの若者に恋をしている。スルタンの音楽小姓であるこの人物は現在彼のお気に入りであり、彼には帝国の最重要の位のひとつであり、ほとんどディヴァーンの議長と同等の地位である」 [p. 72/p. 40]

このように、Ali Ufki Bey よって宮殿では当然の様に同性愛が行われていたことが明らかにされている。さらに、この手記の中では男性だけではなく女性の間でも同性愛が盛んであったと記されている。女奴隷たちの同性愛も厳しく禁止されており、黒人宦官たちはこのような過ちが行われないよう常に女性たちを見張っていた。女性の同性愛が禁止されていたのはスルタンに捧げられるべきである彼女たちの処女性を確実にするためである。

[pp. 72-73/pp. 40-41]

おわりに

本論では Ali Ufki Bey の手記を元に実際に小姓がトプカプ宮殿でどのような生活を送っていたのかを具体的にみてきた。この手記では小姓の調達方法や宮殿での教育、日常生活、さらには小姓たちの恋愛に関する興味深い記述が多数記されている。これらを調べることにより、たんなる制度としての「デヴシルメ」だけではなく小姓として徴用された少年たちから見たオスマン朝の宮廷文化の特異性や問題点を知ることができる。

しかし、本論で用いた資料は第一章で述べたとおり Girardin の書簡からの翻訳である。そのため Ali Ufki Bey だけではなく Girardin の意見も多分に入ってしまったと思われる。そのため今後はイタリア語で記された Ali Ufki Bey の原文を詳しく調べる必要がある。また、同じく第一章で述べたとおり Ali Ufki Bey 以外にも小姓生活を振り返って手記を残しているものが存在する。彼らの手記を読み解き、様々な観点から述べられた小姓としての生活について調べるのがオスマン朝の小姓に関する研究を行ううえで不可欠である。以上のことが今後の課題である。

参考文献

Ali Ufki Bey, çeviren Ali Berktay, *Topkapı Sarayı'nda Yaşam: Albertus Bobovius ya da*

Santuri Ali Ufki Bey'in Anılar, Kitap yayınevi, 2002

Halil İnalcık, translated by Norman Itzkowitz and Colin Imber, *The Ottoman Empire*,

George Weidenfeld and Nicolson Ltd, London, 1973

日本イスラム協会、嶋田襄平、板垣雄三、佐藤次高監修『新イスラム事典』平凡社、2002

Encyclopedia of Islam, Vol. 9, Leiden Brill, 1997